

大坂の陣で堺に居合わせたオランダ人
—平戸オランダ商館往復書簡にみる江戸初期の日本—

フレデリック・クレインス

一六一五年一月二十五日、京都で商務に当たっていたエルベルト・ワウテルセンというオランダ東インド会社の事務員が堺に到着した。東インド会社が当時採用していたのはグレゴリオ暦であるので、この日付を和暦に変換すると、慶長十九年十二月二十六日となり、大阪冬の陣が終わった直後に当たると、その翌日に乗物で大坂へ赴いたワウテルセンは、大坂の大部分が全焼した様子を目の当たりにした。大坂でワウテルセンは九郎兵衛という商人の世話になった。オランダ人事務員は大坂や堺で商品を販売するために現地の商人の仲介に頼っていた。その九郎兵衛の話によると、「大坂の陣の直前に」秀頼が堺を焼き討ちするという噂が広まっていた、彼はそのような事態が起こることを恐れて、堺で保管されていた東インド会社の布織物の商品を数回に分けて大坂へ移送させようとした。最初は布織物五反を大坂へ移送させることに成功したが、二回目に堺へ七反の布織物を取りに行った時に、川を越える許可を得ることができず、仕方なく商品を九郎兵衛の義理の兄弟の家に保管した。その家は「平野」川の西側にあり、その五〜六日後に全焼した。というのも、秀頼の命令の下に放火が行われ、一万五千軒の家が全焼し、四方に大きな空地ができたという。これはいわゆる平野焼き討ちのことである。

このように大坂の陣の戦火に巻き込まれ、東インド会社はいくつかの商品を焼失したが、他方では利益も大いに得ることができた。というのも、この時に多くの大名が大坂に集まっていた、砲弾を造るための鉛の需要があったほか、大名たちが挙って東インド会社の布織物を購入していたからである。彼らは京都の商人よりも気前よく払ってくれるので、ワウテルセンにとって大坂への旅はまずまずの収穫があったようである。

ここで紹介した情報は、堺にてワウテルセンより平戸オランダ商館長スベックスに宛てた一六一五年一月二十九日付の書簡に記載されている。堺に滞在していたワウテルセンからオランダ商館に宛てた同年付の書簡がこの他に数通現存している。そのうち、二月十九日付の書簡によると、大坂は荒地と化してしまい、破壊された家々の修復は、大阪城の堀の埋め立て作業が急がれたので、後回しにされた。堀の埋め立ての資材に用いるために、むしろ、さらに多くの家が破壊されることになった。そうした状況の中、大坂に住むことが困難となったので、九郎兵衛は堺に家を借り、ワウテルセンもそこに滞在していたが、もはや商売をすることはできなくなっていた。

その後の一六一五年四月十一日の書簡には、戦火により布織物が焼失したという九郎兵衛の話は嘘で、九郎兵衛がこれらの布織物を大きな利益で売り捌いていたことが判明したため、ワウテルセンは九郎兵衛が借りている家から出て、他の宿泊先に移ったと記されている。

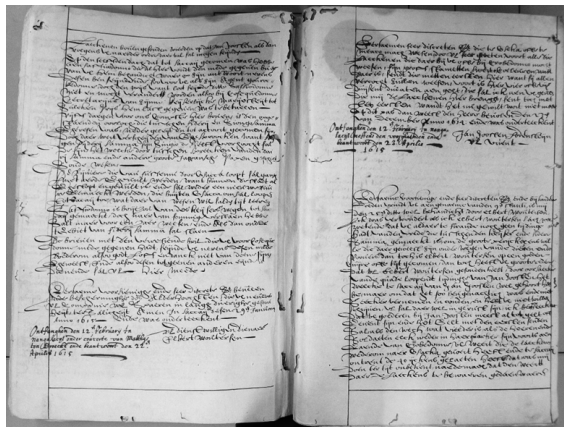
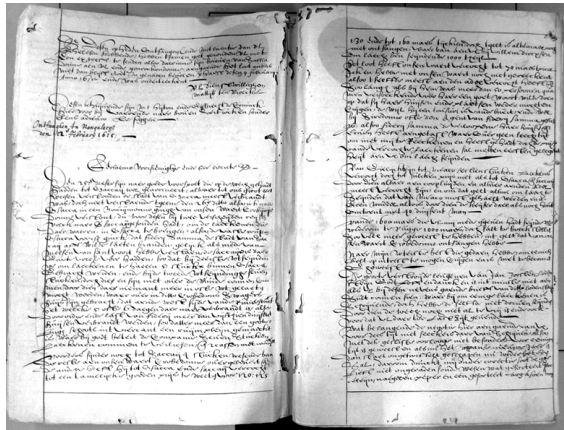
また、五月一日付の書簡では、秀頼が堺を焼き討ちするとの噂が再び浮上し、秀頼がそのような行為に出れば、家康も大坂へ戻り、戦いが再開されると予想されているので、戦火を逃れるために、ワウテルセンは堺に保管していた商品をすべて持って京都へ移ったと記載されている。その手伝いをしたのは、もう一人の商務員マティス・テン・ブルッケである。テン・ブ

ルツケは商品を海路で室津へ運び、そこでワウテルセンは尼崎経由で商品を京都へ運び、二条室町薬師ノ町の与兵衛という商人の家に預けた。この家にオランダ人も宿泊することになり、大坂の役が終わるまで待機していた（一六一五年五月十七日付および五月二十八日付、七月二十八日付の書簡）。

以上紹介したのは、各書簡の内容のうちのほんの一部のみであるが、このような書簡からオランダ人商務員たちの行動や当時の戦乱の状況がある程度窺い知ることができる。しかしながら、大坂の陣がなぜ起こったのか、家康か秀頼のどちらが正当であったのか、家康がなぜ勝利を収めたのか、といった従来の歴史学が扱ってきた、政治史や国家史に関わる大きな問題に対しては、これらの書簡から答えを得られるわけではない。とはいえ、ワウテルセンや九郎兵衛のように大坂の陣に巻き込まれた個人は、これらの歴史上の大きな問題を気に留めていたのであろうか。彼らにとっては、混乱の中でいかにして財産や命を守るべきかという目の前のことで精一杯であったはずである。

歴史をどのような視点でみるのかによって、史料の価値が大きく変わってくる。歴史的出来事の因果関係を説明しようとする場合、歴史の大きな流れを作った家康などの関連史料に目を向けるべきであり、ワウテルセンのような一般人が書いた史料は分析の対象になり得ない。ところが、逆に当時の個人が何をみて、何を考えて、どのように行動したのかについて知りたければ、このような東インド会社の職員の書簡は情報の宝庫である。私はどちらかというと後者に興味を持っている。

私は去年ライデン大学文学部のフィアレ先生と共にハーグ国立文書館が所蔵している東インド会社関連文書の複数の史料群の調査を行ってきた。この調査を通じて、本エッセイで取り上



1615年1月29日付ワウテルセンの平戸商館長宛書簡（シンティア・フィアレ撮影）。ワウテルセンの書簡は当時の平戸商館の写本「受信書簡1614年8月4日から1616年12月29日」（ハーグ国立文書館所蔵NFJ276）に所収されている。

げたワウテルセンの書簡のような、平戸オランダ商館の往復書簡が数多く現存していることが判明した。一六〇九年から一六三三年までの間だけでも五〇七通の書簡を特定することができた。人間文化研究機構において、「平戸オランダ商館往復書簡の基礎的研究」がネットワーク型基幹研究プロジェクト（在外日本資料調査・活用による日本研究と日本文化理解の促進）の一つとして採用されたので、これから数年間かけてライデン大学と共同でその翻刻・翻訳・注釈を行う予定である。

なお、これらの書簡は江戸初期のものである。日本の古文書と同様にくずし字で書かれていて、文法や用語も現代オランダ語と異なるため、解読にはかなりの労力がかかる。また、日本の人名や地名もオランダ人が聞いた通りに綴られているので、難解なものも多い。たとえば、九郎兵衛は *Crohijoyedonne*、与兵衛は *Joffroyedonno*、秀頼は *Fiderijsamma*、家康は *keijser*（皇帝）と表記されている。今後、これらの書簡を解読した上で、和訳を出版することによって、当時のオランダ人による日本での見聞記録を日本の読者に提供していきたい。

（国際日本文化研究センター准教授）